常葉大学教育学部紀要〈論文〉
第41号　2021.3.　1頁～　24頁

日中戦争下天津の文学
―『京津事情』文芸記事について　付・細目（二）

Japanese Literature in Tianjin During the Second Sino-Japanese War

戸塚麻子
TOTSUKA　Asako

（令和二年十一月六日受理）

抄　録

『京津事情』は、日中戦争期に天津で発行されていた月刊誌である。『京津ガイド』として一九三九年一月に創刊、五箇月後に『京津事情』と改題された。さらに、第六巻第四号より『日華文化』に変更される。本稿では、天津日華人倶楽部の機関誌となり編輯方針や執筆陣が変化する以前の、第五巻第一二号までを対象とし、文芸欄の概要について述べる。

初期（一九三九年一月～一九四〇年一〇月）は、文芸記事は少なく、短歌・俳句をメインに川柳、詩、歌詞等が掲載されたが小説等は見られない。

しかし、第三巻第一一号（一九四〇年一一月二〇日発行）に短篇が三作掲載され、それを機に小説がほぼ毎号掲載されるようになる。掲載作品の傾向やそこに見られる思想は一様ではなくさまざまなものがあるが、そのうちいくつか取りあげて紹介する。

キーワード：天津　日中戦争　日本語文学　外地メディア　『京津事情』

『京津事情』は、日中戦争期に天津で発行されていた月刊誌である。『京津ガイド』として一九三九年一月一日に創刊号を発行、五箇月後に『京津事情』と改題された。さらに、第六巻第四号より『日華文化』に変更される。本誌概要については、既に拙稿「日中戦争下天津の綜合雑誌『京津事情』について　付・細目（一）」（註1）で述べた。本稿では、文芸記事を取り上げるが、紙数の関係で、天津日華人倶楽部の機関誌となり編輯方針や執筆陣が変化する以前の、第五巻第一二号までを対象とする。

一　初期―一九三九年一月～一九四〇年一〇月

本稿では、「小説」（または「創作」）が掲載されるまでを便宜上「初期」とする。創刊号から『京津事情』創刊三周年特輯号（一九四〇年一〇月一日発行）までである。

最初期は文芸記事は少ない。前掲の拙稿で述べたが、本誌は創刊当初から狭義の観光案内誌ではなく、時事的なニュースや政治関連の記事、天津を中心とした中国文化の紹介、エッセイ等が掲載されていた。文芸では、短歌・俳句をメインに川柳、詩、歌詞等があり、小説や戯曲、文学に関する評論・エッセイ等は皆無であった。短歌・俳句等の執筆者は毎号二～五人程度であり、また、「短歌欄」「俳句欄」のようなコーナーは設置されておらず、ばらばらに掲載されている。

執筆者はほぼ無名の、天津在住の投稿者であると思われる。北京や他の地域在住の者もいるがメインは天津在住者と考えられる。北京からの投稿が増えていくのは後のことになる。

この時期に三回以上投稿しているものをあげる。三々子が俳句、原島富貴華が短歌と俳句の両方を寄せている。また、堀天津郎が川柳にしばしば挿絵をつけて投稿している。

俳句では他に内山紀美女がいる。初期から終刊近くまで計一九回寄稿している。内山は他に、天津の綜合雑誌『北支那』にも計七回（うち一回は内山紀美子名義）投稿している。

二　中期―短篇小説

「小説」がはじめて登場したのは、第三巻第一一号（一九四〇年一一月二〇日発行）であり、一気に短篇が三つ掲載されている。この号から第五巻第一二号までを「中期」とする。なお、小説と判断してよいか迷うものもあるが、本稿では本文や目次に「小説」または「創作」と明記されているものを「小説」として扱う。

三篇のうち一つは芦沢義郎「貸家」で、巻頭に置かれている。次に、赤川三吉「張家の葬儀」でほぼ中央に掲載、最後に泉芦郎「毒ある花」が巻末に配置されている。「貸家」「毒ある花」は「小説」と明記され、岩井弥一郎の挿絵がついているが、「張家の葬儀」は挿絵がなく、また「創作」とある。

三人はいずれも無名の書き手であるが、芦沢義郎は日本企業の支店で働いており、余暇として時々文章を投稿するという、『京津事情』や『北支那』によく見るタイプの書き手である。『京津事情』では旅行記等がメインで、小説は「貸家」のみである。泉芦郎も会社勤めで（詳細は不明）、エンターテインメントやエンターテインメント寄りの小説執筆に関心があったと思われる。泉

も『京津事情』に旅行記を執筆している。

最後の赤川三吉は、前の二人とはいささか異なる。純文学志向の書き手で、所属等は不明である。なお、芦沢と泉は、これらの小説を見る限りでは、日中間の文化摩擦や、中国人との関係等を描いてはいない。それに対し、赤川三吉はそれらを主題として描いている。

それでは、この三人について、他の掲載小説も併せてみていきたい。

芦沢は前号（一九四〇年一〇月一日発行、巻号表記なし）に「三井物産天津支店保険課長」とある。「貸家」は天津の住宅問題を背景とした詐欺をユーモラスに描いており、主要登場人物は日本人のみである。

泉芦郎は小説を四作掲載している。「毒ある花」は、主要登場人物はすべて中国人であり、中国人富裕層の若者が美人局に騙されかけるが、たまたま警官に声を掛けられ難を逃れる。平凡な物語であり、掲載頁も五頁と短い（大きな挿絵が入っているので実質四頁弱）。この後に書いた作品の方が文字量も多く、作品としての完成度も高い。たとえば、第五巻第九号に掲載された「入れ墨」の方が丁寧に描かれている。

「入れ墨」は、素人小説家・泉芦郎が按摩から聞いた話を記すという形式だが、その奇想天外さからすべて泉の創作と想像される。主要登場人物は全員日本人である。主人公・富美子は、「情夫」であった「与太者」と縁を切るため、上海から天津に逃げてくるが、追ってきた「情夫」に恐喝される。天津の租界は魔都上海イメージと重ねられつつ、「与太者」さえ「お国の為に尽」す「真人間」に「甦生」させる場として描かれている。

こうした天津の「租界」という特質は、探偵小説「白河に浮ぶ死体の謎」（第四巻第七号）では、より意識して活用されている。日本警察とイギリス警察が国家の威信をかけて競い合いながら殺人犯を追う。犯人は（被害者も）中国人である。泉は国際都市「天津租界」ならではのミステリを描いているといえる。

最後に、赤川三吉「張家の葬儀」である。日本人と中国人とを登場させており、「東洋人」（日本人）である通称「王先生」の視点から中国の文化・風習が描かれる。張家の息子が亡くなり、父親の「張先生」が頼ってきたことから「王先生」は、葬儀に関係することになる。葬儀は親族だけでなく大勢の人がやってきて喧騒を極める。やがて葬式が終わり張家の門が閉じられて終わる。以上があらすじであるが、日本人の視点（しかも中国人の生活になじんでいる日本人）から、中国の文化・風習が描かれる。しかし、それらは日本の常識からみて理解できないものとして、風刺的に描かれている。

ただ、さきにも述べたように、赤川には日中文化の違いや、中国や中国人を理解したいという意識がある。「袖縁」（第四巻第一〇号）では、中国に憧れ、中国人になりたい日本人・秋山と、日本の文化が一番だと信じ中国で傍若無人にふるまう日本人・河合の姿が戯画化され、風刺的に描かれている。そして、二人は天津の街角で出遭いながら、まったく縁を結ぶこともなくすれ違う。中国における日本人の二つのタイプ—中国を愛し受け入れる者と日本流を押しつける者—の間に対話も議論もないことを批判しているといえるだろう。さらに、長篇小説「女弟子」では、男女間

の恋愛という形であるが、中国人と日本人との交流や衝突が問題とされることになる。これについては、次章で述べたい。

その他、小説の投稿回数が多い者としては、梅津梅吉と山県鷹四とがいる。梅津は京津事情社の社員である。第四巻第四号の「『北支の文学を語る』座談会」のなかで、阿鳥羽信が「梅津君がかういう会合の計画を立ててくれた」と述べている。同号は、はじめて小説の小特集「現地小説特選集」を組んでおり、これも梅津の企画と推察される。執筆者は梅津以外に山県鷹四、池田顕、藤源亮光、川村耕三がいる。山県と池田は、天津詩人集団（機関誌『居留地』のち『沖積土』に改題）のメンバーで、この号ではじめて登場している。山県については、次章で触れたい。

その他、中薗英助が、第四巻第一〇号に「ながれ」を執筆している。同号では小特集「現地読物傑作選」が組まれていたが、「ながれ」と赤川「袖縁」のみが「短篇小説」として掲載されている。中薗が『燕京文学』同人になる以前のものであり、現在の調査では、これより前に書かれた作品は見つかっていない。「ながれ」については、拙稿「境界線と越境―中薗英助の習作群をめぐって」で述べたので割愛する（註2）。

二　中期―長篇小説

『京津事情』では長篇小説は極めて少なく、三本のみである。第五巻（一九四二年）の前半に集中して掲載された。なお、「長篇小説」の定義も本文や目次の表記に従う。

最初に登場したのは、さきに触れた山県鷹四「熱帯樹」であり、第五巻第一号より第三号まで掲載された。続けて第五巻第二号に赤川三吉の「女弟子」が「短篇小説」として掲載されたが、第二号で本文・目次ともに「長篇小説」に変更される。本文末尾「作者記」に当初短篇のつもりであったが書いていくうちに長篇になったとある。第五巻第八号まで六回にわたって連載された。

「熱帯樹」の連載が終了した翌月の第四号より辻光行「黄河」が連載開始、第五巻第六号まで三回連載されている。第五巻第七号は欠号のため未見。第八号の「編輯余滴」に、「小説「黄河」は検閲の都合でこれも今月号は休載」とある。その後も掲載された形跡はない。

それでは、内容について詳しくみていきたい。紙数の関係で、六回連載された赤川三吉「女弟子」について述べ、山県と辻については、簡単に触れることとしたい。

「女弟子」のあらすじは以下の通りである。「中華舞踏学園」（途中から「中日舞踏学園」）の西洋舞踏教師・江間浩一は、生徒の一人で「暗い何とも手のつけようがない感じ」がする陳英美が気になっている。日本語教授兼通訳の朱思貴は、英美を「性格は異常で、人と共に生活するのに不適当なところがある」と語る。ある時、江間が講義のなかで第一次世界大戦のさなかに「自己の舞踏に全生命を打ち込んだ」ダンサー、マリー・ウイグマンの話をする。英美は「戦争の最中でも踊ることが正しい」のか、「看護婦にでもなつて従軍する事の方が尊い」のではないかと言い、教室を出ていってしまう。従軍とは抗日戦争への参加を意味しており、また江間にとって「人生唯一のもの」である踊りに「反逆」するものでもあった。江間は英美に憤りを感じつつも同時に愛し

ていることに気づく。夏から冬になり、英美は江間に長い手紙を残し、学園を去る。親の決めた結婚、そこに象徴される中国の旧思想に抵抗するためであった。四月になり、「中日舞踏学園第一回芸術公演」が開かれる。成功に終わり、花籠が届くが、送り主の名は書かれていなかった。江間は英美だと思い、客が去り始めた劇場を必死になり探す。しかし、英美の姿はどこにもなかった。

「女弟子」では、日本人・男性・教師と中国人・女性・弟子という、当時日本人男性作家がしばしば用いた権力の構図を用いている。この舞踏学校は、日本人園長がキリスト教徒で、中国の少女たちから「はつきりした授業料を取らず、食べるもの寝るのも全て一切世話する」という経営方針であり、少女たちを思想的にも善導することを目指している。江間も、英美に怒りを感じつつも、懲罰を与え「外形上に於て彼女に恐怖の念を起さしたところで」意味はなく、「思想を悪化させる許りで何等利するところは無い」と考える。しかし、実際には英美を問いつめ、平手打ちをしてしまう。挙句の果てに、自分の「人生唯一のもの」に「反逆」してくる英美を愛していると思う。同時に自らの「暴力」に対し「自己嫌悪」を感じてもおり、さまざまなことに迷いや葛藤を抱えている人物として描かれている。

他方、英美は中国の「新青年」として、中国の現況を見据え、それに反逆し変革しようとする人物として描かれている。踊り以外には消極的な江間に対し、萌芽的だが主体的意志を持った人間として造形されている。それが明確になるのは連載五回(第六号)の英美の江間宛の手紙である。自覚を持った一人の中国の女性が自由を追求し、自我を貫こうとすれば、他人からは「異常」と見え、ハリウッド女優やパーマネントに関心を持つ他の少女たちとはうまくコミュケーションが取れない。英美は中国人のなかでも異質な存在として描かれているのである。

そして、最後に江間は、「強い近視」により目がかすみ、眼鏡を吹いたり目をこすったりしながら英美を探すが、見つけることはできない。江間をある種無様ともいえる姿で描いて物語を閉じているのである。ここに、江間と英美の関係の逆転を読むことができるのではないか。学園の方針や登場人物たちの言動に日本人による中国統治の思想をみることはできる。しかし、日本人・男性・教師を対象化し、批判するまなざしをみることもできるのである。なお、この作品の舞台は天津か北京であると推察される。

最後に、その他の二作品について簡単に触れて稿を閉じたい。

山県鷹四は、前掲「『北支の文学を語る』座談会」の中で「昭和十一年五月当地に来た」と述べている。元『京津日日新聞』文芸欄を担当、座談会の時点では天津民団考査課に勤務。「天津詩人集団」の主要メンバーで『北支那』に何度も投稿している。

「熱帯樹」は、一九三四年末から約一年間のハノイを舞台としている。「二十一歳の若者」浦昌二郎は、伯父のつてを使ってハノイに渡り、ハノイでの欧州人による現地支配の実態に直面する。そして、「日本人精神」を体現した虎退治の名人・牧村や、ベトナム解放運動、すなわち「東亜民族の解放と云ふ崇高なる仕事」に挫折したベトナム人・ワンに出遭う。浦は一年間のハノイ生活で何をもなしえないが、様々な人々のなかに「日本人精神」を見出し、また、満洲事変に触発されたというワンに出遭うことによって、東亜建設と指導民族としての日本人という「理想」を再認識

し、帰国の途につく。作品を通して、浦の（作品の、といいかえてもよい）ナショナリズムに揺るぎはない。執筆時の山県の思想を反映していると考えてよいだろう。

最後に辻光行「黄河」である。『京津事情』に掲載された辻の作品はこの一作のみである。張家口の日本人小学校に勤める崎村、崎村の妹で中国人の女子中学校に勤務する妹の田鶴子等、青年たちを描く。崎村の学校で窃盗が相次ぎ、生徒光子を疑うが、どのように指導してよいか思い悩む。また、田鶴子は教え子・花琴が、貧困故に日本人に売られそうになり、解決に尽力する。花琴とその家族を通して中国の婚姻や貧困問題が描かれ、また、光子の家庭の問題もほのめかされる。そこに崎村、田鶴子、その他の人物たちとの恋愛が複雑にからんでいく予感を秘めつつ、伏線が展開されないまま検閲により連載は中断された。

「黄河」では、崎村兄妹の生徒への愛情や、男女の恋愛、善悪に関する問題提起等が描かれ、指導民族としての日本人という観念は見られない。花琴をめぐっては中国ならではの貧困が描かれるが、日本人である光子の問題とある種等価に描かれている。また、田鶴子は花琴の問題を主導して解決する理知的な人物で、判断力、行動力では兄より勝っているともいえる。田鶴子は花琴を友人の女性医師に託すが、「看護婦」ではなく男性と対等な「医者」であることが強調されており、ジェンダー的観点からも興味深く、未完で終わったことが惜しまれる。

なお、辻が戦後に出版した『小説囲碁人間』（註3）の「作者過去の覚え書き」によると、『蒙疆新聞』『燕京文学』『北支那』『京津事情』等に小説を書いたとある。『北支那』に辻光行の名を見つけることはできず、別名を用いた可能性もある。『燕京文学』には第一〇号（一九四二年二月）より同人となったが、現在発見されている号に辻の名前はなく、第一八号掲載の第一九号予告に「短篇小説」「発生」と記されているのみである。

以上、長篇についてみてきたが、それぞれ作品の舞台、素材も違えば、テーマも異なっている。また日本という国家に対する捉え方、中国へのまなざしも大きく異なっている。

『京津事情』文芸記事は、特定の編輯方針によらず、寄稿者が自分の書きたいものを自由に投稿していた形跡がある。それは前掲の拙稿で述べたように、編輯者阿鳥羽信が、文学はよく判らないが支援する、という方針を取ったことにも拠るだろう。

註

1　『常葉大学教育学部紀要』第四〇号、二〇二〇年、一―二四頁。

2　『戦間期東アジアの日本語文学』アジア遊学一六七、二〇一三年、二四〇―二四八頁。なお、「ながれ」は『朱夏』第一六号、二〇〇一年に再録されている。

3　『小説囲碁人間』井草出版、一九八二年。

『京津事情』細目（二）

一、以下は『京津事情』第四巻第七号（一九四一年七月一日発行）―第六巻第三号（一九四三年三月一発行）の細目である（ただし、第五巻第七号は欠号）。中国国家図書館蔵のものを参照したが、一部国立国会図書館のものを併せて参照した。

一、書誌は各号の始めに刊行年月日、号数の順に記した。
一、細目は本文に即して採り、目次表題と異同の著しいものに限り＊を付し、各号末に注記した。中段が著者名、下段に掲載頁を記した。
一、仮名遣いは原文のままとし、漢字は原則的に新字に改めた。また、数字や記号などは原文のままとし、あえて統一はしなかった。
一、本文の表記のほか、各号の巻頭目次及び本文内容を参照して補訂した。
一、［　］内は補校訂・注記であり、本文には表記されていないものである。
一、誌上に設けられた各欄の名称は〈　〉内に記した。
一、目次や本文に分類内容が記されている場合は〈　〉内に記した。
一、著者名または発言者の肩書や出身地が記されている場合は（　）内に記した。
一、口絵及び広告は略した。
一、その他、留意すべき項目には＊を付し、各号末に注記した。

昭和一六年七月一発行（四巻七号）

防諜座談会
（出席者）鳥越正勝（華北交通株式会社鉄路外事班天津分駐所長）　朝長正男（江商株式会社天津支店長）
若林秀一郎（横浜正金銀行天津支店支配人代理）門脇忠雄（天津領警署高等主任外務省警部）　門多義道（日本綿花株式会社天津支店長）　川添勝太郎（天津日本居留民団警防課長）　吉野勝（天津領警署高等課外務省警部）　田淵幸雄（天津防衛司令部陸軍中尉）　高山国光（日本憲兵隊天津隊本部陸軍憲兵少尉）　中山佐吉（三井物産株式会社天津支店次長）　藤田敏郎（天津防衛司令部陸軍少尉）　近藤孝一（在天津日本総領事館外務省書記生）　近藤益一（日本憲兵隊天津隊本部陸軍憲兵准尉）　浅井孝作（天津領警署高等課外務省巡査部長）　森知虎（北支軍報道部天津出張所長陸軍中佐）　2-18

時事思付三則　加藤日吉　19-21
家庭と工芸　井岡咀芳　22-28
偶感一束　加藤秀　29-30
〈音楽のページ〉＊1　ＳＳＲ生　31-32
基地の断章
大陸の曙／読書慾〈詩〉　高橋武二　33-34
長城に唱ふ〈短歌〉　住田朝郎　34
教壇から
天津は好い所　江間寿子（天津松島高女校教諭）　35
保姆は祈る　沖田天津子＊2（天津日本幼稚園保姆）　36-37
教え乍の教訓　斉藤要（天津共立学校教授）　37-38
子等と共に　栗原芳子（天津淡路国民校訓導）　39-40
或る若き女性達　山県鷹四　41-43
支那の宗教（二）　中野義照　44-48

雑詠〈短歌〉　芦沢富士子　48
天津洋妾噺　四名実　49-53
〈映画のページ〉　塩見生　54-55
〈随感随想〉
洋服・狂言・グライダー　石津耕三　56-60
華北の自給経済対策　築山乙次郎　60-63
現代女性と複雑性　K・K生　63-64
井岡咀芳論　水戸野抜作　64-66
論説なき都市〈新聞時評〉　品川放笑　67-70
戦時下の日本を観る
中国青年の奮起に俟つ　王宝錕　71-73
私の見たる日本女性　劉素清　73-75
日本は躍進す　郝沢霖　75-77
青年の目に映じた日本　多金峯　78-79
租界は踊る　ヂヤーナリスト日記（二）　東巴里夫　80-84
〈華北電影ニュース〉　80-84
〈文学のページ〉現地文壇への序曲　梅津梅吉　85-89
北支へ来るまで（三）（弥次喜多道中記の巻）　南地　花迺家蝶六　90-98
婦徳への最高峯は白ゆりの花　首藤戒定　99
〈現地綴方教室〉北載河の夏の海　芦沢富士子　102-103
白河に浮ぶ死体の謎〈探偵小説〉　泉芦郎　104-119
〈編輯後記〉　編者　120

＊1　目次では「映画のページ」とある。

＊2　目次では「冲田天津子」

昭和一六年八月一発行（四巻八号）

第二次治安強化運動標語集　池松勝　2-3
宣伝戦と科学的判断＊1　4-9
住宅と市場問題〈社会時評〉　上杉謙作　10-14
天津演劇研究会の発足　奥村正雄　15-16
天津演劇研究会に就いて　霊門蛇夫　17-19
天津演劇研究会の道　川村耕三　20-22
犬　演出ノート抄　内山水棹　21
「同志の人々」の演出に就て　三夫生　23
劇研ゴシップ　秋本一男　24-25
第一回発表会を顧みて「号外」頭梁・「同志の人々」永山　長沼幸雄　26-27
演劇に就いて　神村幹男　27
素人演劇　柴田可寿馬　27
舞台装置に就て　郁田静二　28-29
髭と闘ふの記　田中磋磨介　29
第一回発表会を終りて　山田幸祐　29
内山常任幹事に感謝する　竹下冽子　30-31
天津演研第一回発表会を観て〈批評〉　山田生　31
第一回公演の観想と愚想〈批評〉　K・Y生　32-33
大陸文学脚本コンクール　原稿募集　綱代重二　34-37
37

〈音楽のページ〉　ＳＳＲ生　38-39
支那の宗教（三）　中野義照　40-49
反共思想と銃後婦人　中山清子（大日本国防婦人会天津支部長）　50-51
綜合雑誌論　品川放笑　52-55
最前線慰問行　北支へ来るまで（四・一）　南地　花迺家蝶六　50-61
〈映画のページ〉　梅吉　62-63
回顧・天津戦事の頃
夏日―四年前の思ひ出―　長谷川一郎　64-65
天津駅籠城戦を回顧して　中村利三郎　66-69
演研初公演を観る　坂本周治（元白樺演劇部並阪妻プロ宣伝部長）　70-72
ニュー天津巡り四　ジャンダークとシヤンソン　Ｂ生　73-75
〈随感随想〉
暁に祈る　宮家寿男　76-78
風雲騒ぐ南の国　印度を想ふ　四名実　78-83
大宰治のこと　土田公平　83-84
滑空適性の話　石津耕三　84-86
時局とスポーツ　杉野忠三　87-90
文化対談　山県鷹四　梅津梅吉　91-107
租界は踊る　ヂヤーナリスト日記（完）　東巴里夫　91-102
旅の姉の立場〈職場日記〉　柳璟熙　103-104
〈華北電影ニュース〉　108-110
「文学派」の前進〈文学のページ〉　梅津梅吉　111-114
〈華北交通資料〉　115-127
出発〈脚本〉　川村耕三　128-135
〈編輯余滴〉　阿鳥羽生　136

＊1　七～九頁にかけ、伏字による大幅削除がある。

昭和一六年九月一発行（四巻九号）

〈扉〉九月のこよみ＊1　1
〈天津の租界を衝く〉
資産凍結令以後の天津の英米国人の動向
河村二四郎氏（横浜正金銀行天津支店支配人）に聴く　久米秀雄　2-3
劇を通じて見た『支那女性観』　4-13
〈天津の租界を衝く〉〈時局解説〉資産凍結令と
その対応措置　長谷川一郎　14-17
〈音楽のページ〉　ＳＳＲ生　18-19
最前線慰問行　北支へ来るまで（五・二）　南地　花迺家蝶六　20-23
酔漢追放その他〈社会時評〉　上杉謙作　24-27
〈天津の租界を衝く〉現段階に於ける「租界」の
一考察―時の問題―　栗山正　28-32
天津の体力章検定〈時の話題〉　33
現地に於ける結婚問題　首藤戒定　34
移り変る天津　望月芳朗　35-36
天津のスポーツ展望　杉野忠三　37-40

天津に於ける半島同胞の活動状況　私は斯く思ふ　池田広男（朝鮮総督府事務官兼外務事務官）　41
〈人物列伝〉
金沢大鉉氏　山本健二氏　大川尚俊氏　金山賛亨氏
金城秀光氏　金光碩太郎氏　松平有朝氏　青山三
蔵氏　伊藤相平氏　杉原政雄氏　箕原大舜氏　金岡
寛泰氏　玄堪氏　42-53
公立病院新築問題〈時の話題〉　54
最近読んだ本　伏見洋一郎　56-59
廃墟／第一線〈詩〉　高橋武二　60
天津居留民会は何処へ往く（一）　島木赫平　62-65
蒙疆の学芸欄　品川放笑　66-70
〈映画のページ〉　梅吉　71-72
迷亭先生覚え書　柏原健而　73-75
北戴河の一日〈現地綴方教室〉　梁川照子　76
〈華北電影ニュース〉　77-79
〈華北交通資料〉　80-90
〈短編小説〉雪降り始めぬ　那須竜児郎　91-104
〈編輯後記〉　編者　105

＊1　末尾に「馬芷庠氏編「歳時記」から」とある。以後同巻一二月号まで同様。

昭和一六年一〇月一発行（四巻一〇号）

〈扉〉十月のこよみ　1
第二奉直戦　松原閑作　2-16
〈音楽のページ〉　SSR生　17-18
対支文化工作について　大矢信彦氏に話を聴く＊1　19-21
ながれ〈短篇小説〉〈現地読物傑作集〉
中薗英助　二木あきら・画　22-26
民国初期の学生運動　陳端志　長谷川一郎・訳　27-40
文化雑感
沙漠の詩歌――蒙古民謡考　奈笛修一　41-43
抒情についてのノート　沼田英一　43
作家の責任　梅津梅吉　43-46
素人と玄人　天津演劇研究会に寄せて　江原鶴之助　46-47
会社員生活〈ユーモア小説〉〈現地読物傑作集〉
上杉謙作　森茂・画　48-64
最前線慰問行　北支へ来るまで（五・三）
南地　花迺家蝶六　65-69
皇軍慰問行　望月芳朗　70-72
支那風俗考『怪奇と犯罪』　久米秀雄　73-96
石仏を見て　川崎武郎　97-102
中華燐寸工場を視る　商工会議所主催の
現地工業見学団に参加して　望月芳朗　105-107
現代男性選〈現代小説〉〈現地読物傑作集〉
梅津梅吉　柴田可寿馬・画　108-118
現地学童の母に贈る（第一回）　木村謙　119-121
天津の商店　河村香二　122-125

お灸物語〈ユーモア小説〉〈現地読物傑作集〉　藤源亮光　池野一満・画　126-138
袖縁〈短篇小説〉〈現地読物傑作集〉　赤川三吉　139-145
廃品更生（日本租界街名読込み）〈新作漫才〉
〈現地読物傑作集〉　蝶六生　146-150
〈華北電影ニュース〉　146-150
〈華北交通資料〉　151-159
〈編輯後記〉　編者　160

＊1　末尾に「大矢氏は庸報社々長」とある。

昭和一六年一一月一発行（四巻一一号）

〈扉〉十一月のこよみ　1
現地技術の問題―建築技術の発展に就て―　松本政雄　2-7
天津の県人会（一）　本社調査部　8-14
銃後の戦士としての我等の大使命　小宮山涛天　15-19
〈音楽のページ〉　ＳＳＲ生　20-21
〈課題〉臨戦体制下に於ける天津の生活設計表　天津興亜奉公会　22-25
最前線慰問行（完）　南地　花迺家蝶六　26-31
将来を期待される温湯鎮温泉〈資料〉　32
〈人物列伝〉白河敬亮氏　33
現地学童の母に贈る（第二回）　木村謙　34-37
中国映画私論　那須竜児郎　38-42
小林千代子さん転居　42
東亜美術協会秋季展批評　北秋雄　43-53
〈華北電影ニュース〉　43-46
〈陣中断幸〉鮨／戦ひすんで〈詩〉　高橋武二　47-50
詩人〈詩〉　池田顕　51-52
葬船〈詩〉　菊江広光　52-53
蒙古風〈短編小説〉　石田幾人　54-58
〈人物列伝〉兪原珠鎔氏　59
〈華北交通資料〉　60-67
〈編輯後記〉　編者　68

昭和一六年一二月一発行（四巻一二号）

〈扉〉十二月のこよみ　1
天津世相鼎談会
（話す人）中島忠三郎（在天津日本総領事館司法領事）
増田沖三（在天津日本総領事館司法領事）　木附今朝
蔵（在天津日本総領事館司法書記生）
（本社側）阿鳥羽信　梅津梅吉　2-13
現地学童の母に贈る（第三回）　木村謙　14-17
〈音楽のページ〉　ＳＳＲ生　18-19
中国人の複雑さ　杉野忠三　20-23
〈人物列伝〉江島潤次氏　24
スケッチの旅にて・北支新河・［絵と文］　毛利磁　25-29
『ぺきん』と『てんしん』　望月芳朗　30-32

〈映画のページ〉　S生　33-34
天津演劇研究会第二回公演会　綜合匿名批評
文芸部編　R　35
天津演芸研究会の第二回公演を見て
池谷作太郎（大日本文化聯盟理事）　39-40
華北運輸株式会社「支那名・華北運輸股份有限公司」
〈会社春秋〉　41-42
ベートーベンを語る〈レコード音楽〉　山県鷹四　43-53
十一月二十日を期し列車のダイヤ改正　43-53
蓮房〈詩〉　池田顕　54
続・天津の商店（喫茶店の巻）　川村香二　55-57
〈人物列伝〉金沢震根氏　58
〈現地綴方教室〉秋雨　芦沢富士子　59
〈現地綴方教室〉退院を待ちて　梁川照子　60
深尾茂氏を語る　X・Y・Z　61-62
〈華北交通資料〉　63-73
〈編輯後記〉　編者　74

＊1　目次には「北支各鉄道列車ダイヤ改正」とある。

昭和一七年一月一発行（五巻一号　新年特輯号＊1）

天津邦人の三大報国運動〈巻頭言〉　1
決戦下の東亜と華北の政治　栗原一夫　2-10
綴り方教育と自然科学　石田住次　11-14
〈翼賛欄〉　15
支那の剣劇『武工漫録』　久米秀雄　16-47
決戦下の歳末に想ふ〈随感随想〉　加藤日吉　48-50
現地翼賛運動の前進　中村利三郎　51-54
十二月八日〈短歌〉　住田朝郎　55
家庭女性についての偶感　加藤生　56-58
赤鉛筆〈随感随想〉　宮家寿男　59-60
歴史と文化――或る居留民集会で談話　平田小六　61-69
一つの詩論　池田顕　70-73
瘤と内出血〈随感随想〉　滝沢福夫　74-77
小売統制の方向と特殊性　杉野忠三　78-82
時局に対する我等の覚悟〈現地綴方教室〉　梁川照子　83
皇国百年の隆替を決すべき年を迎ふ〈年頭の辞〉
加藤三郎（在天津総領事）　84-85
執筆者紹介　85
天津経済界の役割重く責務亦大なり〈年頭の辞〉
岡本久雄（天津商工会議所会頭）　86-87
事実綺譚　黄彩華の復讐（上）　石川竜生　88-99
熱帯樹　第一章〈長編小説〉　山県鷹四　100-106
江戸煩　便宜坊　107
〈華北交通資料〉　108-125
〈華北電影新聞〉　108-122
大東亜戦争〈現地綴方教室〉　梁川忠　123-125
〈編輯後記〉　編者　126

＊1　目次では「新年特別号」、表紙では「新年特輯号」とある。

昭和一七年二月一発行（五巻二号）

戦争と言論　長谷川一郎　2-7
〈会社と組合〉天津に於ける商業統制組合　望月芳朗　8-9
地図〈時局読物〉　日下十三　10-18
南方戦線〈短歌〉　住田朝郎　18
〈翼賛欄〉　19
中国映画漫語　高崎春義　20-35
千載一遇・忘れ得ぬ感激＊1〈往復回答〉
（題字）加藤三郎（在天津総領事）
（回答者）岡利輔（天津神社）　石川竜星　栗原一夫
赤崎茂信（日本工業新聞社北支総局長）　川添勝太郎
（天津居留民団警防課長）　清水昌雄（天津鉄路局調査科）　光頭山人　N生　芦沢義郎（三井物産天津支店保険課長）　石山謙郎（天津日本公立病院長）　梁川孝（日本綿花株式会社天津支店）　福田武雄（天津居留民団翼賛課次長）　勝田重直（勝田法律事務所・弁護士）　36-47
〈華北交通資料〉　36-47
〈時の話題〉流言蜚語について　A生　48
興味津々　事実綺譚　黄彩華の復讐（下）　石川竜星　49-65
国民演劇について　深海政夫　66-73
「胖人不福相」談義　便宜坊　74
日本技術の展開　松本政雄　77-79
大東亜建設について　林文竜　80-84
天津の県人会（二）　本社調査部　80-84
大東亜戦争と現地経済人の覚悟　深尾茂　85-86
大東亜戦争〈現地綴方教室〉　芦沢富士子　85-87
武士道とは死することなり　東山武　87-92
寒稽古〈現地綴方教室〉　芦沢俊郎　88-90
大東亜戦争〈短歌〉　新村穂水　91-92
〈えんげき〉　坂本円三　93
〈大東亜戦と華北民衆〉
大東亜戦争の意義　楊玉徳（愛善東友会員）　94
大東亜民族の解放　呉春帆（愛善東友会々員）　95
文字の神秘　三輪太　96-103
女弟子〈短篇小説〉　赤川三吉　104-110
文学における形式　梅津梅吉　111-114
天津旅館街　115
熱帯樹　第二章〈長篇小説〉　山県鷹四　116-126
静かなる夜［詩］　芦沢富士子　126
〈編輯後記〉　編者　127

＊1　目次では「感激」の前に「十二月八日の」とある。

昭和一七年三月一発行（五巻三号）

〈扉〉万寿山仏香閣　二木あきら・絵　1

巻頭言に代えて＊1　阿鳥羽信　2-6
幼少年少女読物の統制とその動向（一）　天野雅穂　7-14
北支那風俗月評　吉家英　15-17
〈翼賛欄〉　18
支那銀行発達百年史（上）　藤沢昇　19-24
現地学童の母に贈る（第四回）　木村謙　25-27
天津繁昌記（一）　松原閑作　28-33
〈会社報告〉華北交通の一二、一月分鉄道貨物輸送概況　34-35
現代中国女流作家とその作品
　其の一・『幼き者の母冰心女士』　荒木修平　36-54
〈華北交通資料〉　36-54
印度志士プラタップ事件　石川竜星　55-60
現地商業青年の給与問題　川村香二　61-65
科学する飛行機〈ユーモア・レポート〉　田中磋磨之介　66-71
中国新劇運動　久米秀雄　72-84
〈文学のページ〉天津詩人集団最近の動向　池田顕　85-86
大陸生活と住食衣〈随筆〉　武田成堂　87-88
面子（めんづ）　平津幸雄　89-91
新著月評　天野雅穂　92-95
新造型美術協会と中野画伯に就て　翁木丸児　96-97
天津の県人会（三）　本社調査部　98-100
〈華北電影ニュース〉　98-101
春のおとづれ〈現地綴方教室〉
　梁川照子（松島高女二年）　101
女弟子（三）〈長篇小説〉＊2　赤川三吉　102-105
熱帯樹　第一章＊3〈長篇小説〉　山県鷹四　106-116
〈編輯後記〉　編者　117

＊1　目次には「高陞号撃沈事件其他」とある。
＊2　前号（第五巻第二号）では「短篇小説」となっており、「（一）」「（二）」を掲載。本文末尾に「作者記」があり、当初は短篇の予定であったが、書いていくうちに長篇になったとある。
＊3　「第三章」の誤りである。なお、末尾に「完」とある。

昭和一七年四月一発行（五巻四号）

〈扉〉街頭風景　中野政行・画　1
華北政治の寸考　栗原一夫　2-4
戦場の夕〈詩〉　高橋武二（前線勇士）　4
日本の美と支那の美―支那建築に関する雑感―　長谷川一郎　5-10
〈翼賛欄〉　11
宣伝機関としてのラジオの特質　中川日露士（天津放送局長）　12-14
支那銀行発達百年史（下）＊1　藤沢昇　15-19
港の町〈俳句〉　内山起美女　20
幼少年少女読物の統制とその動向（承前）＊2　天野雅穂　21-28
中国新劇運動（前承）＊2　久米秀雄　29-43
〈映画のページ〉　T生　44-45

現代中国女流作家とその作品
其の二・酒後派作家『淑華女士』　荒木修平　46-65
〈華北交通資料〉　46-65
〈大陸女性の頁〉
淑女たるべき形を忘るな〈婦人時評〉　南木三　66-68
〈軍神の母を思ひ現地の母の覚悟を語る〉
課題に答へて偶感一つ　中山清子（国防婦人会天津支部長）　68
子供は母の鏡　中島慶子（大丸百貨店）　69
母君を讃ふ　音羽芹子（天津会館）　69-70
日本女性の特色　川崎とめ（大丸百貨店）　71
〈職場日記〉
現地婦人の洋装　窪田元子（洋裁■＊3）　72
寸暇と私　佐藤多鶴子　73
現地商業青年の給与問題（前承）＊1　川村香二　74-76
〈文学のページ〉　鷗　77-78
女弟子（四）〈長篇小説〉　赤川三吉　79-85
新著月評　天野雅穂　86-89
黄河（一）〈長篇小説〉　辻光行　90-103
〈編輯後記〉　阿鳥羽生　104

＊1　目次には「（完）」とある。
＊2　目次には「（一）」とある。
＊3　一字判読できず。

昭和一七年五月一発行（五巻五号　天長節特輯号）

〈奉祝・天長節〉
賀詞　加藤三郎（在天津日本総領事館総領事）　2
謹みて聖寿の万歳を寿ぎ奉る　臼井忠三（天津居留民団民団長）　2-3
天長の佳節を祝して　岡本久雄（天津日本商工会議所会頭）　3-4
幼少年少女読物の統制とその動向（承前）＊1　天野雅穂　5-9
天津繁昌記（二）天津と日本海軍㊀　松原閑作　10-16
春の街〈俳句〉春の街　内山起美女　16
天津繁昌記（補遺）　宇斉生　17-19
菜館雑観〈川柳〉　堀天津郎　19
厄年談義　便宜坊　20
酒・女・映画と居留民団税　伊藤玖平　21-25
絵画と工芸の再出発　渋晧二　26-28
中国新劇運動（前承）＊1　久米秀雄　29-33
美術展覧会　来る八月北京で　33
回首津門漫話（一）　石原巌徹　34-44
新著月評　天野雅穂　45-48
〈芸術性と娯楽性の問題〉
音楽　山県鷹四　49-54
映画　塩見光正　55-58
若き経済人よ起て　深尾茂　59-60

綴り方と現地児童読物の関係（一）　石田住次（天津淡路国民学校訓導）　61-63
〈大陸女性の頁〉
澄んだ瞳〈婦人時評〉　憂津生　64-65
新しい時代の母　北支交通路の自衛に挺身する　愛路青少年隊と婦女隊　X・Y・Z　66-68
春暁〈現地綴方教室〉　芦屋富士子　69
女弟子（五）〈長篇小説〉　赤川三吉　70-75
〈華北交通資料〉　76-86
黄河（一）〈長篇小説〉　辻光行　87-98
〈編輯後記〉　ア＊2　99

＊1　目次には「(三)」とある。
＊2　目次には「阿鳥羽生」とある。

昭和一七年六月一発行（五巻六号）

〈扉〉　中野政行・画　1
戊戌日記　袁世凱　本社編輯部・訳　2-10
〈翼賛欄〉　11
佐藤信淵の大亜細亜政策　石川竜星　12-16
中国新劇運動（前承）＊1　久米秀雄　17-31
現地配給業者の理念と共商会　谷津儀男（共商会幹事長）　32-33
綴り方と現地児童読物の関係（二）　石田住次（天津淡路国民学校訓導）　34-41
賢明なる本能＊2　42
回首津門漫話（二）　石原巌徹　43-46
演劇ノートより　深見政夫　47-53
痴言片々　福井青児　53
納税組合と天津に於ける其の胚胎　伊東玖平＊3　54-63
天津芸能報国会の皇軍慰問行　原秘書・記　64
花譜　生野長太郎　68-70
黄昏〈詩〉　高橋武二　70
（紅）（頭）（嶼）（物）（語）　沼川武夫　71-78
〈華北交通資料〉　71-85
ある女性の革命—片岡景子を繞る一小論　白木梅雄　79-84
婦人時評（若き奥さまの通信）　南木三　87-89
もうこ風〈現地綴方教室〉　芦沢麗子（国民学校四年生）　90
女弟子（六）〈長篇小説〉　赤川三吉　91-96
黄河（三）〈長篇小説〉＊4　辻光行　97-102
〈編輯余滴〉　阿鳥羽信　103-104

＊1　目次には「(四)」とある。
＊2　目次の著者名は「便宜坊」
＊3　本文の著者名は「伊東」であるが、末尾で「伊藤」の誤植であると訂正されている。なお、目次では正しく「伊藤」となっている。
＊4　第五巻第八号の「編輯余滴」に、「小説「黄河」は検閲の都合でこれも今月号は休載」とある。その後も掲載された形

跡はない。

昭和一七年八月一発行（五巻八号）

〈表紙〉　中野政行・装釘
〈扉〉街頭所見　千地琇弘・画
星条旗天津から消ゆ　米国外交団を上海まで送りて　近藤孝一（在天津副領事）　2-7
京津春秋　阿呆鳥　8-9
天津の体育事情（一）　桑原治雄　10
回首津門漫話（三）　石原巌徹　11-16
天津日本教育博物館設立の縁由と其の性格（一）　X・Y・Z　17-18
婦人時評（第三回）　南木三　19-20
〈随筆〉
県顧問の手記　筬島千代太（獻県公署顧問）　21-22
東京にて　滝沢福夫（北京経済研究所）　23-26
うづら　臼木梅雄（天津居留民団）　26
大陸色彩学ＡＢＣ　藤代道三　28-29
子を想ふ　長沼幸雄（天津日本商工会議所）　29-30
幼少年少女読物の統制とその動向（前承）　天野雅穂　31-35
夏の歌〈短歌〉
淵上和枝（天津松島高女三年）　福本朝子（仝）　神初
漾子（仝）　菊地利子（仝）　宮本叔子（仝）　加藤泰子
（仝）　山辺久子（仝）　石原ヱミ子（仝）　35
第二回　天津芸能報国会　皇軍慰問行　原秘書・記　36-38
天津日本商工会議所　副会頭選挙傍聴記　佐藤陸雄　39-40
紅楼夢雑話〈広告〉　便宜坊　41
諦・同情・黙考に就いて――或る老医師の語る　近頃世相談義――　幾山河＊1　42-46
国民音楽建設への指針　草野剛（天津松島高等女学校音楽科主任　天津混声合唱団主任）　47-49
哈響を聴く〈音楽時評〉　山県鷹四　50
扶輪学校の調査に観る日・満・華学童体位の比較　現地邦人児童の養護に示唆　A・B・C　51-53
時の人物　田尻、石田、久野　天津艀船を牛耳る人々　54
〈華北交通資料〉　55-60
女弟子（七）〈長篇小説〉　赤川三吉　62-67
〈編集余滴〉　阿鳥羽生　68-69

＊1　文末に「文責在記者」とある。

昭和一七年九月一発行（五巻九号）

〈扉〉　蒼竜子・画　1
〈大陸ところ〴〵〉
〈北京だより〉北京の断想　儘田信彦（北京・東亜新報記者）　2-4
〈新京だより〉実行の国満洲　小屋利雄（新京満日直営所）　4

〈徐州だより〉　中原短信　網治生　5
〈大連だより〉北京鴨子　野中時雄（大連農事株式会社社長）　6
雑詠〈短歌〉　奥村吉江　6
〈大陸ところ〴〵〉
〈前線だより〉故国の友へ　高橋武二
（北支派遣楓第四二五六部隊斉藤（一）隊）　7
〈楡次だより〉治安は良好　A生　9-10
〈青島だより〉日支共栄のサンプル　西村聡（大阪毎日新聞社青島通信部主任）　10
〈朝鮮だより〉朝鮮雑筆　沼川武夫　11-16
〈開封だより〉沙漠の町より　荒木修平　16-19
〈太原だより〉晋祠廟と五台山　大岩直温（太原自動車営業所々長）　19-23
回首津門漫話（四）　石原巌徹　25-36
羅曼の海〈詩〉　北川原幸朋＊1　28-29
時々片々　谷一馬　37-39
音楽時評　緑丘正美　40
婦人時評（第四回）　南木三　41-42
酒の話　安達清　43-45
日本的なる思想の展開　だいじゅあん　46-50
郷愁〈詩〉　北川原幸子　49
オキシフルと小便〈随筆〉　赤木純　51-53
夏に思ふ〈随筆〉　増井かほる　53-54
雑詠〈短歌〉　草別節子　54
想ひ出の水禍〈随筆〉　望月芳朗　55-56
小さな反抗―或日の日記から―〈随筆〉　白水寿美子　57-58
相撲・野球・水泳〈随筆〉　山県鷹四　59-60
京津巷談　X・Y・Z　61
〈名品消息〉
我が区の喜び　金看板の先駆　久米秀雄（河東第三区副区長）　62-63
誇るべき区民各位の国家的観念の旺盛さ　森伝吉（河東第一区区長）　64-65
幼少年少女読物の統制とその動向（承前）　天野雅穂　66-67
舞踏時評　沼川武夫　68
八月の天津封切映画評　鷗　69-77
〈事業と人物〉大陸文化事業に貢献する亜細亜化学工廠／プライマインキ創業者本松祐義氏＊2　69-71
〈事業と人物〉華北の業界に雄飛する曽我商店天津出張所／北支の基礎を固めた増山孔二氏＊3　72-75
田島天津領警署長逝去　75
〈事業と人物〉診療に忙殺さるゝ東海林氏（東海林歯科医院々長）＊4　76-78
防空壕　77-78
黄土美術協会の生誕　79-80
天津日本教育博物館設立の縁由と其の性格（二）　X・Y・Z　81-82
汽車の旅〈綴方教室〉　芦沢富士子　83-84
入れ墨〈小説〉　泉芦郎　86-101

〈編輯後記〉　編者　102

＊1　目次では「幸朋」ではなく「幸明」。
＊2　目次では「亜細亜化学と本松氏」とある。
＊3　目次では「曽我商店と増山氏」とある。
＊4　目次では「天津歯科界の雄東海林氏」とある。

昭和一七年一〇月一発行（五巻一〇号　創刊五週年記念号）

〈扉〉天津風景　多田栄二・画　1
〈第五次治安強化運動展開〉
第五次運動の全貌　王揖唐（華北政務委員会委員長兼華北治強総本部長）　2-7
華北治安の確保は大東亜建設の先駆　土田豊（北京日本大使館参事官）　8-10
治強運動と防諜　井尾格（天津憲兵分隊長）　11
治安強化と物価問題　林文竜（華北政務委員会情報局長）　12-13
邦人の錬成望む　臼井忠三（天津居留民団長）　14-15
山西蒙彊廻遊所感［漢詩・五首］　岡田信治　16-20
京津巷談　X・Y・Z　21
回首津門漫話（五）　石原巌徹　22-28
国民音楽建設への指針（前承）　草野剛　29-31
〈えんげい〉
南十字星の下で　奥村正雄　32
天津演劇研究会の再出発　32-33
劃期的な文化工作　京劇『御碑亭』の撮影を見る（一）　久米秀雄　34-39
〈大陸ところ〴〵〉
〈青島だより〉鉄道を通じて見たる山東の展望　神代新市　40-48
〈上海だより〉大東亜経済上海の断想　翁木丸児　49-51
時々片々　筑波喬　53-54
音楽夜話（一）　芹川協一　55-60
大亜細亜への道（一）　石川竜生　61-67
〈映画のページ〉　鷗　68
大東亜建設と華道精神　木下瀟雲　69-70
地方文学など〈随筆〉　山県鷹四　71-72
巡回文庫に依る図書の普及〈随筆〉　A・B・C　72-75
友への手紙〈随筆〉　朝咲美絵子＊1　75-76
歩哨［短歌］＊2　高橋武二　76
青年の特異性と態度に就て〈随筆〉　辻正友　76-77
海南鳥古話〈随筆〉　小林哲夫　77-82
中国の婦女を如何に指導するか　永田美那子　83-90
天津写真聯盟の結成と戦時に於ける写真の使命　天津写真聯盟　91-93
〈時の人〉返り咲いた河本大作＝山西産業社長＝　谷一馬　94-96
〈文学のページ〉　池田顕　97
大東亜戦争下の人的資源と北支に於ける結核の

早期治療　木下秀良　98-104
鷗どり（他四篇）〈詩〉　北原政吉　100-101
〈天津の事業と人物〉
鉄壁の陣容を固めた天津艀船運輸株式会社　105-106
独歩の地盤を築いた朝日興業と三谷義登氏　107-108
剣道実践家の範　野崎市郎氏　109
驢馬〈現地綴方教室〉　芦沢麗子　109-110
同志　石井清春　111-113
断層［短歌］＊2　卯木亮　113
〈本誌最近号主要目次〉　114
〈受贈図書〉　114
〈編輯余滴〉　阿鳥羽信　115-117

＊1　目次では「朝吹美絵子」とある。
＊2　目次に「俳句」とあるが短歌である。

昭和一七年一一月一発行（五巻一一号）

〈扉〉街頭所見　千地琇弘・画　1
戯解西廂記　雲雨園主人・訳　2-17
〈短歌〉
雑詠　服部寿恵子　20
戒衣抄　卯木亮　20
夜　高橋武二　20
雑詠　松尾生　20
京津巷談　白河渉　21
回首津門漫話（六）　石原巌徹　22-31
大亜細亜への道（一）　石川竜生　32-39
〈随筆〉
汽車の中　龍瑛宗　40-41
古本のはなし　山県鷹四　41-42
釣の妙味　淡路志摩男　43-44
天津の月―芭蕉に就いて―　翁木島芳昭　44-46
天津日本教育博物館に就て　設立の縁由と其の性格　紫竹林　47-52
時々片々　筑波喬　53-54
劃期的な文化工作　京劇『御碑亭』の撮影を見る（一）　久米秀雄　55-58
寂光〈詩〉　北原政吉　58
音楽夜話（二）　芹川協一　59-63
〈文学のページ〉　池田顕　64-65
〈防諜は期間行事ではない！〉
防諜の意義　池上発一（天津憲兵隊長）　66-69
防諜に関する話　井尾格（天津憲兵分隊長）　70-75
時局下の新商店経営　杉野忠三　77-82
〈映画のページ〉　鷗　83
〈大陸ところ〴〵〉
〈朝鮮だより〉京城の印象　赤松孝彦　84-86
〈海南島だより〉海南島の料理・豚　小林哲夫　86-88
〈本誌最近号主要目次〉　89

〈受贈図書〉 89-90
〈消息〉 90
〈編輯余滴〉 阿鳥羽信 91-92

昭和一七年一二月一発行（五巻一二号）

〈扉〉街頭所見 千地琇弘・画 1
開戦一年の天津
この儀忍ぶべくんば何をか忍ぶべからざらん／空念仏の「機会均等」と「門戸開放」／文化の美名に辺幅美化された米国の対支野望／日本軍英租界に進駐す　行政支那側へ移管さる／経済部門の新動向、聯銀券一色化と日本側の進出／なにもかも米英色を払拭して面目一新／恩威並び行ふ皇軍の在津敵国人の取扱ひ／その後の在津敵国人はどうしてゐるか？ 松原閑作 2-29
現地漫画
柴田可寿馬〈序文〉
高　王琢　金樹延　蘇　洪泉 30-36
時々片々 筑波喬 37-38
〈天津寒雷会句稿〉
鎌原幹　須藤紫煙　浅井白兎　室野邦彦　佐々木柏葉
竹内他郎 39
戯解西廂記（二） 雲雨園主人・訳 41-46
興亜人の心理的構想 大元善彦 47-50
回首津門漫話（七） 石原巌徹 51-57
大亜細亜への道（三） 石川竜生 58-65
北京の興業界〈随筆〉 佐藤一馬 66-67
策と道〈随筆〉 高橋鉄舟 67-69
前線から〈随筆〉 高橋武二 70-71
近詠〈短歌〉 松尾美都子 71
貯蓄談義〈随筆〉 須磨庸児 72
〈映画のページ〉 鷗 73
〈本誌最近号主要目次〉 74
〈受贈図書〉 74-75
〈消息〉 75
〈編輯後記〉＊1 76

＊1　目次には「編輯余滴」「編者」とある。

昭和一八年一月一発行（六巻一号　天津日華人倶楽部結成特輯号）

〈表紙〉 柴田可寿馬・画
〈扉〉 柴田可寿馬・画 1
〈天津日華文化人倶楽部の発足〉
経過報告 阿鳥羽信（準備委員） 2-3
祝辞 矢野中尉（〇〇部隊宣伝班長） 3-4
祝辞 臼井忠三（天津興亜奉公会々長） 4-5
祝辞 中原孝治（天津特別市公署宣伝処） 5-7
祝辞 杉野忠二（天津日独伊親善協会理事長） 7-8

祝辞　中川日露士（天津広播電台長）8-9
宣誓　古内秀和（天津宣伝美術家協会）9-10
宣誓　小椋繁治（黄土美術協会　代表者）10
宣誓　森茂（大潮会美術協会洋画部会員　天津白河会洋画美術協会）10-11
宣誓　長崎精一（極第二九〇〇部隊宣伝隊　壁画班）11
宣誓　河村虎吉（天津写真聯盟　代表）11
宣誓　清水正男（北支写真作家集団天津支部　支部長）11
宣誓　内山水棹　秋山一男　11-12
宣誓　池田顕（天津詩人集団　代表）12-13
宣誓　岡木晴樹（短歌線社代表）13
宣誓　宮古田竜（華北詩人協会準備委員会）13
宣誓　久保松華（俳句春聯天津支部長）13
宣誓　仙翠済　三原袖甫（未生流家元師範代）社中　みどり会　14
宣誓　黒田栄鵬（天津支那劇研究会代表）14
宣言　天津日華文化人倶楽部　14
挨拶　奥村正雄（準備委員）14-15
天津日華文化人倶楽部第一回委員会　16-19
回首津門漫話（八）　石原巌徹　20-26
満洲芸文に就て〈満洲通信〉　藤川研一　27-31
天津日華文化人倶楽部の表象　柴田可寿馬　29
短歌と人生　荻尾宰一　32-33
統制経済下に於ける商人道　深尾茂　34-38
〈風俗時評〉　まさを　39-40
大陸詩人結集の為の理論　宮古田竜　41-44
大陸詩と絶対詩　池田顕　45-47
天津の日〈短歌〉　堺井三郎　48
初詣〈俳句〉　久保松華　49
天津宣伝美術家協会について　柴田可寿馬　51-52
ひとまはり〈随筆〉　奥村正雄　53-57
〈映画時評〉　まさを　58-59
時事所感　加藤日吉　60-63
大東亜戦争第二年に題す　岡本久雄（天津日本商工会議所会頭）64-65
本年の課題　福井隆一（株式会社天津銀行頭取）66-67
大細亜への道（四）　石川竜生　69-76
〈文化人倶楽部消息〉　77-78
天津ペン倶楽部に就いて　79
〈編輯後記〉　阿鳥羽生　萩尾生　80

昭和一八年二月一発行（六巻二号）

〈表紙〉　柴田可寿馬
死地に生き亡地に存す〈巻頭言〉　後庭信　1
治外法権撤廃運動の回顧　長谷川一郎　2-10
天津英租界進駐後の変貌　大塚勇吉（極報道班）11-19
入選作品　現地漫画　史宗印　黄冠廉　毛夢雲　20
〈吾等の主張〉
演劇と指導　久米秀雄（天津話劇聯盟）21-23

商業宣伝美術　柴田可寿馬（天津宣伝美術家協会）23-24
漫協の過去・現在と将来　史宗印（天津漫画協会）25
戦時新聞論　中川篤二郎　26-28
回首津門漫話（九）　石原巌徹　29-37
演劇譚　川村耕三　39-43
天津特政区第一公演の英国無名戦士の碑に与ふ〈詩〉　宮古田竜　42-43
〈風俗時評〉　まさを　44-45
運命〈随筆〉　奥村正雄　46-51
年酒〈俳句〉　内山水棹　52
梅佳節〈俳句〉　久保松華　53
音楽夜話（三）　芹川協一　54-59
大亜細亜への道（完）　石川竜生　60-63
〈随筆〉
俳句と心のゆとり　久保松華　64-65
世界的新文化の創造　出淵中次　66-67
哈爾浜の印象　牧野伸　68-70
創造の理念　大元善彦　71-73
広東短信　楠本秀明　73-74
心の片隅で　藤代道子　75
〈映画時評〉　まさを　76-77
〈受贈図書〉　76-77
大東亜戦争詠〈短歌〉　岡本晴樹（短歌線社中）　78
天津一年の回顧　伊東貞夫（極報道班）　79-80
使命を帯びて　萩尾宰一（天津日華文化人倶楽部実践委員）　81-84
時事片々＊1　85-86
京津巷談　85-86
冬の月〈俳句〉　鎌原幹　87
読者文芸　短歌　選者・堺井三郎
天　佐佐木重徳　地　高橋武二　人　卯木亮
佳作　鶴岡秀子　蕗野みゆき　船戸孝次　安田阿蘇子
橋本うめ子　周白洋　盧園　松尾美絵子　88
選後所感　坂井三郎　88-89
寒雷会句稿
須藤紫烟　浅井白兎　室野邦彦　竹内他郎　浅田一稲
岸武骨　阿部浜茄子　小張雲水　90
〈消息〉＊2　91-97
林房雄氏来燕　97
〈編輯後記〉　編者　89

＊1　目次に「筑波喬」とある。
＊2　目次には「天津日華文化人倶楽部消息」とある。

昭和一八年三月一発行（六巻三号）

〈表紙〉　柴田可寿馬・画
〈扉〉北京の玄関　蒼竜子・画　1
天津日華文化人倶楽部に寄す
谷萩那華雄（大本営陸軍報道部長）＊1　2-4

思想戦上の華北日本人　栗原一夫　5-8
〈天津日華文化人倶楽部　講演と映画の夕〉
国府参戦と在留邦人の覚悟　世良田部隊長　9-11
長期戦の意義　臼井忠三　12-16
使命を帯びて　萩尾宰一（天津日華文化人倶楽部実践委員）　17-24
〈風俗時評〉　まさを　25-26
国民演劇以前その他　畑中五郎　27-30
〈吾等の主張〉
国民合唱運動　高野淑夫（天津混声合唱団）　31-32
抱懐　池田顕（天津詩人集団）　32-34
血液酸毒症［広告］　35
回首津門漫話（一〇）＊2　石原巌徹　36-49
随感三題　小塩正栄　50-53
〈受贈図書〉　53
海底トンネル〈短歌〉　萩尾宰一　54
現地非常食糧対策　中野宗一　55-69
北海の哀話　村上知行　70-73
〈映画時評〉　まさを　74-75
〈随筆〉
窓硝子　金子文六（在天津司法領事）　76-77
華北体育偶感　増田沖三＊3（在天津司法領事）　77-78
映画雑観　山田生（東亜新報社員）　79-80
北京の娯楽界　佐藤一馬　80-81
女性・美・モラル―西鶴「五人女」を中心に―　三浦晋（満洲日々新聞社員）　82-85
祈病癒〈短歌〉　堀将教　84
皆吉爽雨氏歓迎俳句大会記　天津ホトトギス俳句会
部隊長室〈俳句〉　田元北史　86-89
白河の曲り〈俳句〉　清水清山　86
雛〈俳句〉　内山水棹　86-87
蹴羽子〈俳句〉　久保松華　87-88
粉雪〈俳句〉　田元北史　88-89
寒雷会句稿　鎌原幹　89
須藤紫烟　塚田畏神　室野邦彦　浅田一稲　近藤天
津城　田中生　竹内他郎　尾見泉　上原きく子　90
〈消息〉＊4　91-95
〈陣中欄〉　97-110
北支軍加藤報道部長を囲んで　109-110
〈編輯後記〉　111

＊1　末尾に「萩尾宰一記」とある。
＊2　四五、四六頁上段に一〇行程切取あり。検閲か。
＊3　目次では「増田冲三」。
＊4　目次には「天津日華文化人倶楽部消息」とある。

＊本稿は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 18K00335　代表者・戸塚麻子）、並びに同（課題番号 20K00357　代表者・竹松良明）の研究成果の一部である。